

〈谷口雄太論文掲載にあたっての経緯説明〉

本号には、『奈良史学』第四一号所収の濱松里美論文に対する批判として、奈良大学史学会非会員である谷口雄太氏（中世日本史、現青山学院大学文学部史学科教員）の投稿論文が掲載されています。二〇二四年度の奈良大学史学会会長として、以下に谷口論文掲載に至る経緯をご説明いたします。

本誌第四一号が二〇二四年二月一日付で発行され、奈良大学リポジトリでもすぐさまインターネット公開されたところ、同年六月、かねてより私木下と研究交流のあった谷口氏より、濱松論文に対する疑義がメールで示されました。疑義の内容が、事実認識や史料解釈の簡単な誤認といった「軽微」なもの——歴史学ではこれ自体、重要な批判となりますが——であれば、本人同士の私信のやりとりで済ませてよかったのですが、本号の谷口論文にあるように、濱松論文への批判内容が、研究史整理や引用の方法、および論理展開といった重要事におよぶことがわかりましたので、木下から谷口氏へ、濱松氏のためのみならず、研究史全体の建設的な発展のためにも、是非批判論文を発表していただきたいこと、その際には、公共的な一学会でもある奈良大学史学会の健全な運営のため

にも、投稿先として『奈良史学』も是非ご検討いただきたいことをお伝えしました。

その後、八月末に谷口氏より、『奈良史学』へ批判論文を投稿する意志がある旨の連絡があり、奈良大学史学会の構成員である史学科教員へ投稿の可否について諮りましたところ、査読を前提に投稿を可とすることが九月半ばに決定されました。これをうけ、一〇月前半に谷口論文の投稿があり、すぐさま日本史教員二名・世界史教員一名にて査読をおこない、若干の修正意見を加えて掲載を可とすることが決定され、本号での収録に至りました。

建設的な批判と反批判の場が保証（保障）されることは、学問と学界（学会）の民主的存立と健全な運営・発展という、学術の根幹に関わる決定的な重要事です。『奈良史学』がそのような場を提供できていることを誇りに思うとともに、それを実現し、歴史学者として真摯にご対応いただいた谷口氏に、あらためて厚くお礼申し上げます。

（二〇二四年度奈良大学史学会会長 木下光生）

『奈良史学』第四二号をおとどけます。今回も盛りだくさんの内容となりました。寄稿者のみなさまありがとうございます。さらに広範に議論がかわせる場になるよう工夫をすすめてまいります。

（編集担当 河内将芳）